

祝開場55周年

令和 6 年

理事長挨拶
塩原カントリークラブ
理事長 渡邊 勇雄



新年明けましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては良いお年を迎えられたこととお慶び申し上げます。

旧年中は格別のご愛顧を賜り、誠にありがとうございました。

昨年は、国体開催コースに後押しされ、関東女子ミッドアマチュア選手権予選競技大会を開催、無事競技を終了することが出来ました。会員の皆様ご協力ありがとうございました。

今年は 5 月に関東女子倶楽部対抗予選が当クラブにおいて開催されます。

会員の皆様には当クラブ女子研修会への応援宜しくお願い致します。

今年度より新たにクラブ競技としてグランドシニア選手権を立ち上げましたので、奮ってご参加をお願い致します。また、4大競技の 1 つシニア選手権が参加人数不足でここ数年開催が出来ておりません。競技方法をグロスその他ハンディ戦を合わせての競技に変更を致しましたので、こちらも奮ってご参加宜しくお願い致します。

昨年 4 月より乗用カート乗り入れが開始されました。懸念されていた芝の状態も良好で安堵致しました。会員の皆様におかれましては、ご家族・ご友人をお誘い合せの上、ご来場戴きますようお願い申し上げます。

末筆となりましたが、会員の皆様とご家族のご健康、ご繁栄を祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



ギャラリー・`温故知新、(上)

～開場55周年に～

那須良輔、杉浦幸雄、横山隆一、近藤日出造、富永一朗・・・。
戦中から戦後にかけて活躍した漫画家です。政治、社会、風俗などに風刺漫画、いわゆる「オトナの漫画」の名手。このうち那須さんは塩原カントリークラブのメンバーで、昭和59(1984)年～昭和63(1988)年頃までのクラブ会報「塩原」に、挿絵付きでのコラムを寄稿していました。その原画14枚が、クラブハウスのコンペルームに飾られています。那須さんは平成元(1989)年に、この世を去りましたが、これらは、まさに`お宝、です。Web会報「塩原」では、開場55周年にちなんで、年明けの今回と次号でそれらを蔵出ししました。

那須さん曰く。「塩原カンのコースはフラット、周りは緑一色。夏場ちょっと気になるカミナリ様だが、これも毎日訪問というわけではない。しかし、若い美人ゴルファーが来ると、久米の仙人ではないが、たまにはカミナリ様も見とれて、雲から足を踏み外すかもしれない」。今から40年ほど前、周辺開発交通渋滞などで、名門コースの評判が落ち始めた時、「ゴルフより、土地の値上がりが楽しみだよ」と言った友人を、那須さんを「財産をあの世まで持って行く気らしい」と皮肉った。古き良き時代の空気が流れる。

地域振興にも一役



開場当時は、周辺に酪農家が点在するほかは鬱蒼とした赤松混じりの雑木林が広がっていた。夜ともなると、ツキノワグマをオーナーにキツネやタヌキがプレーを楽しんでもおかしくないような雰囲気だったろう。知る人ぞ知るだが、渡辺勇雄・塩原カントリークラブ理事長はクラブハウス建築の若き現場監督だった。「よく現場事務所に泊まり込んだ」という。昭和44年4月14日のオープンセレモニーは北1番ティーンランドに設けられた祭壇で行われ、始球式で那須さんら5人が5色のスモークボールを打ち上げ、緑のじゅうたんの上で処女ラウンドを楽しんだ。開場に合わせて、砂利の馬車道だった関谷と那須を結ぶ横断道路は拡幅舗装され、蛇尾川にかかる塩那端はコンクリート橋になった。地域振興にも一役買った。



池が凍っても…。



冬の寒さは、今より昔の方がひどかったという人が多い。だが、真冬はクローズ同然。雪に見舞われると、雪解けに3日、4日はかかるだろう。でも、覚え立てのゴルフ好きは、気がはやって霜柱が消えなくてもティーンランドに立ちたい。中1番のスタートホール、凍り付いた池に…。ボールは甲高い音を残して、そのままコースへ。

フォアー。右に左へ…。



那須さんはプロの球筋を「スピードと飛距離を自由に打ちこなし、タマを遊ばせるようなことはない」と評した。

そして、自分のそれは、「ケモノミチ」と自認して、悠然とプレーを楽しんだ。曰く。「(私のタマは)ラフに飛び込んだり、松の下に転がりこんだり、イタチかタヌキが好みそうなところを好む。それでいいのだ」。ボールを捜しに行くと、草の中でセンブリの花など、思わぬ出会いがあるのを喜んだ。もっとも、「これはゴルファーの心境ではなく、絵描きの心境かもしれない」と断っていた。



赤松無残



恐らく南コース8番だろう。フロントティーから200ヤード地点から連なる松。開場当初は計5本あった。そして、左側の松の向こうに山桜の老木が枝を広げていた。この松の何本かは、旧塩原町と西那須野町の境界に沿って、わざわざ植えられた。コース内の赤松は一時は800本を数えた。

近年、松喰い虫のせいで、松の枯死が激しい。ところで、クラブハウスの玄関前で左右に2本の赤松が迎えてくれるが、向かって左が太郎松、右が次郎松と呼ばれる。右は開場3年目に枯れたため、2代目なので次郎だ。もっとも双方合わせて「夫婦松」と呼ぶ人もいるという。

人それぞれ、あるがまま。



那須さんがゴルフを始めたのは、昭和30年代。「飲み友達や、漫画家仲間とコンペをするうちにズルズルとゴルフの魅力に引き込まれた。素振りは素晴らしいが、本番になると見違えるようなメタメタ打ちになる」と告白。少々せっかちだったらしく、「打つ前のシキリの長い人は、仲間をいらいらさせる。本人は余り感じていない様子だが・・・」

また、「自分はパットがのろいくせに、人がのろいと怒る人もいる」とも。「ゴルファーには紳士もいるし、あんちゃんもいる。老人もいるし青年もいる。お互い楽しくプレーしたいのだから、人に迷惑をかけない心掛けだけは大事である」と戒めている。



昔、ながらたばこ、今は？



昭和から平成、令和にかけて、ゴルフ場で激変した光景のひとつは、プレーの友、みただった喫煙が姿を消したことだ。かつては、カートにはいうまでもなく、カート、ティイングランドには必ず灰皿が置かれていた。クラブハウスのそこそこに、「プレー中のおたばこはお止め下さい」、「コースでのポイ捨てはお止め下さい」の注意書きがあった。それでも、上がりホール付近になると、灰皿はいっぱいになり、カート道沿いには「ポイ」と捨てられた吸い殻が散らばっているのも珍しくなかった。中にはグリーン近くでパッティング終えた人が紫煙をくゆらす姿もあった。那須さんもこれには頭にきていたらしく、松やカラスに注意させる図を2枚遺している。時代は下って今は、こと喫煙に限っては、ストレスを及ぼす場面はないと言ってもいいだろう。ただ、気になる光景に、ながらスマホがあるか！

(つづく)

塩原カントリークラブ！攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ — ☆ 南コース 4 番 ☆



【コース解説】

やや左ドックのミドルホール。1打目は左コーナーのバンカー右端に構えてスイングしていきたい。このバンカーを嫌がると右に構えてしまい大きなミスに繋がる。勇気を出して構えて欲しい。2打目はグリーン手前にバンカーと松の木があり右にもバンカーがあるため狭い花道を狙いたいが・・・グリーンセンターやや左に構えてグリーンエッジ+5ヤード打つ感じでスイングしたい。グリーンは左奥やや手前から傾斜がありピン左につけると楽なパットが出来る！

次回は、南コース 5 番を紹介します!!



那須の小天狗—小針春芳伝②

井上 安正

江場友幸は陰鬱な気持を紛らせようと、東京・銀座の三越本店で開かれていた服飾デザインの個展を見に行った。そのスタイル画をひと目見た途端、体に電流が走ったような気がした。個展の主は、その頃、服飾界では飛ぶ鳥を落とす勢いだったデザイナー・長沢節だった。居合わせた長沢本人とデザイン論などを話し込むうち、「その情熱があるなら、ボクの学校に来てみないか」と名刺を渡された。次の日、「生徒募集中」のポスターが貼られた長沢のデザイン学校の門をくぐると、生徒がモデルを前にデッサンの最中だった。江場はそのまま服飾デザインを学ぶことになり、そこに二年間通い授業の手伝いをするまでになっていた。

フォーマルな紳士服のデザインに魅力を感じ、メーカーから「自由なデザインで紳士服を作って欲しい」という注文を受けるようになった。那須で兄が浅草にある紳士服専門の洋服店の女性社長の別荘を建てたのがきっかけで、デザイン学校に通いながらそこでアルバイトをした。その店は自前のブランドの紳士服も開発して、手広い商売を展開していた。

四階建てのビルを持っており、「一番上の部屋が空いているから使っていいよ」と言われ、そこから学校に通った。デザイン学校を卒業してからも、就活なしでほぼ一年は住み込みの専属デザイナーとして、女社長の片腕にまでなった。浅草の商店街で従業員のボウリング大会が毎年開催されていた。その大会に飛び入りで参加することになった。五、六万円だったと記憶しているが、「マンハッタン」という名のボールまで買い込んで優勝した。

ボウリング熱は頭打ちになりかけ、その大会が最終回となり、それまで持ち回りだった背丈ほどの優勝カップを取り切った。それを紹介した商店街のミニコミ紙を読んだプロボーラー・矢島純一から「プロになったらどうだ」と直々に誘われもした。

住み込み始めた頃、屋上から毎朝、異様な音が聞こえてきた。“鳥カゴ”と称される小さいゴルフ練習場があって、ボウリングに代わる従業員のリクリエーションとして、ゴルフコンペが企画され、旦那衆がそれに向けてクラブを振っていた。江場にゴルフの心得があることを知って、女性社長から息子にゴルフを教えてくれるよう頼まれた。息子はゴルフをやったことがなかったが、跡継ぎ候補を、コンペに出さないわけには行くまいと考えてのことだった。

杉本英世プロとの出会い

二つ返事で三十万円を用意してもらい、アメ横のゴルフショップで、息子の道具一式を揃えた。予算の中から、自分のシューズも新調し、東京・港区の芝にあった大きな有名練習場に通って、息子にゴルフを教えた。近くの打席で、杉本英世プロがデュエット歌手の「ヒデとロザンナ」のヒデにレッスンをしていた。何度か顔を合わせるうち、息子に手本を示したスイングを見た杉本から、「お茶でも飲もうか」と声がかかった。

練習場の喫茶店でコーヒータ임을重ねるうちほめられた。「いいスイングするね」、「誰に教わっているの」と聞かれた。佐々木先生の名前を出すと、杉本も「道理で……」と納得した。息子にスイングをたたき込むため、半月ほど練習場に毎夜通い続けた。杉本もレッスンに顔を出し、ヒデの後はこれも売れっ子の若い女性民謡歌手が生徒だった。一年間ほど、息子とその練習場に通ったから、杉本とは気軽に声を掛け合う仲となった。



江場の生き方には、かつての日活映画の青春シリーズに出てくるヒーローと趣がかぶる。ただ、好奇心が探求心になり、トコトン極めてみたい。やるからには、一番を目指す。その性分は自認するところだった。

そのうち、浅草の住み込みデザイナーの立場はそのままにして、超一流ではないが、有名デパートに店を構えるアパレルメーカーに、デザイナーと営業幹部を兼ねて就職した。デパートに出した店で、自分がデザインした洋服の売上を伸ばすには、様々な手練手管を使わなければならない。デパートの専業店員にまかせておくだけでは、売上の数字は動かない。デパートの店員やその上司を取り込まなければ、大手メーカーの商品に客を誘導されるばかりだ。

現場に出て自社派遣の売り子に、お客さんの呼び込み方を伝授する。閉店後はデパート売り場担当の幹部社員やライバルメーカーの社員と、情報収集を兼ねた宴席を持たなければならなかった。会社が羽田空港近くにあったため、ゴルフ練習場も芝から離れ、杉本ともすっかり疎遠になった。その分、酒量が増える一方で、ついには肝臓を痛めて入院という最悪の事態に陥った。

那須の兄と一緒に暮らす母親にも一切連絡せず、入院治療を秘密にしておくつもりだった。天網恢々である。誰がどうして、入院の事実を知ったのか、兄の会社の株主の一人が病院を訪ねて来た。「ここで一人ぼっちで闘病していても仕方ないだろう。黒磯の病院で療養した方がいい。病院には段取りをつけてある」という。

熱心に日大の建築学科への進学を勧めてくれた兄の思いを蹴ってから、五年ほどがたっていた。「自分が行ったら気まずい思いがつのるだろう」。わざわざ株主をよこしたのは、そう考えた兄の“親心”だったかも知れない。転院話を有り難く受けざるを得なかった。

地方の小都市にも住宅の新築ブームが押し寄せて、兄の会社の建築部門もウケに入っていた。医者細かいアドバイスもあって、体調もみるみる回復し、兄の勧めもあり、住宅の設計を手伝うようになった。江場のデザインを下地に書かれた設計図をもとに建てた住宅の施主からは、「都会の香がする」と、幸いにも評判が良かった。

子供の頃、ゴルフというスポーツへの入り口の扉を開いてくれた兄だったが、その頃のゴルフの腕前は、江場の方がはるかに上だった。業者間の付き合いや、接待ゴルフは弟の受け持ちになってしまった。

下請けの塗装会社の社長がゴルフ好きで、毎月、兄の会社の出入り業者やその従業員を集めてコンペを開いていた。江場の初出場を前にして、ハンディをいくつにするか聞かれた。「5か6でいいですよ」と答えたのに、社長権限で「20」と決められた。当然ながら、江場のブッチギリの優勝だった。「何があった」、「ハンディでインチキをしたんじゃないか」と大ブーイングが起きた。社長からは、次からのハンディは「3」と申し渡され、競技委員長に指名される一幕もあった。

佐々木先生との再会

仕事にも充実感を持てるようになり、日常生活も落ち着きを取り戻した。「これじゃ東京へは帰れないかも」。そんな予感を抱き始めた。東京で付き合いしていた女性を那須に招いてあちこち案内した。本人が那須の自然を気に入り、兄や母からも好意をもって迎えられ結婚した。江場が二十六歳、妻も同じ年だった。

江場は兄の会社の近くのアパートに生活の拠点を移した。移って早々に、那須ゴルフ倶楽部のプロ室に、小針を訪ねた。



武蔵野美大に入って、間遠くなってからの東京の生活や、ドライバーからアイアンまでのクラブ作り修業などを報告して話し込んだ。「ちょっと待てよ。君の先生が栃木に来たぞ」と棚から出したプロ会員名簿をめくり、「佐々木勉」の名前を指さした。そこには、古賀志カントリークラブ所属とあった。

江場が高校時代に教わったあのゴルフの先生に間違いなかった。那須ゴルフ倶楽部で小針が江場のスイングを見てくれるようになった時、「いいスイングだ。誰に教わった」と聞かれて、佐々木の名前を出したことがあった。それを忘れずにいてくれて、佐々木の動静にも気を遣ってくれた心の温かさと律儀さに感動した。

兄の建設会社の仕事にも馴染んで来て、建築現場の監理・監督を任されるようになった。東北高速自動車道にある大谷パーキングエリアのリニューアル工事を手がけ、発注元の担当者への対応には苦労させられたが、最終的には二百万円の黒字を出し、社業に大きく貢献出来た。

実はこの現場は、佐々木が総支配人兼所属プロとして勤めていた古賀志カントリークラブから、車で三〇分ほどしか離れていなかった。ウィークデーであれば、声をかけると、思いの通りにスタートを取ってもらえたおかげで、発注元の担当者をラウンドに誘うことが臨機にできたうえ、時にはハーフなら佐々木がラウンドに付き合ってくれた。そんなことが幸いして、工事はスムーズに進んだ。

江場はその頃、建設会社員の一方で、若いプロや研修生から、クラブの調整や修理を頼まれて気軽に引き受けていた。いわば二足のワラジをはいた状態だった。そうした作業用に倉庫のような作りではあったが、工房を建て、必要な工具や装置を少しずつ買い増していった。

江場の腕の確かさは、月例会に参加した若手プロや各ゴルフ場の研修生の口コミで広まっていた。遠く東京や千葉からクラブ持参で、車を飛ばしてくるプロまで出てくるようになった。修理や調整だけでなく、江場モデルのクラブセットを作るようになった。

(つづく)

編集後記

明けましておめでとう御座います。皆さんにとってどんな年明けでしたか。2024年の干支は「甲辰」と書き、「きのえたつ」と読みます。「甲」は物事の始まり、「辰」は万物が振動し、草木が生長し活力が旺盛になる状態を表すといわれます。「変革(転機)」「激動」がキーワードで、これまでの努力が実って夢が叶う年とも言い換えられます。ちなみに、この前の甲辰の年には、東海道新幹線が開通し、最初のオリンピックが開かれています。

井上 安正